

英語は、英文法、豊かなボキャブラリー、発音練習・暗唱、書き取り練習、そして、会話を徹底追求！！－先生は、直説法(英語の授業は英語で)を目指そう－

開倫塾

塾長 林明夫

Q 1 : 開倫塾では、外国人留学生対象の日本語学校を開校しているそうですね。日本語指導と日本人への英語指導で違うことは何ですか。

A : (1)開倫塾では、開倫塾日本語学校を2018年に設立、現在は、80名の海外からの留学生・近くに住む在留外国人約20名への日本語指導と、近隣の中学校・高校・企業で学び・働く方々への日本語の出張授業を行っています。

(2)開倫塾日本語学校の特色は、①先生方は、すべて日本語教師の資格を有する方々であること、②日本語指導は「直説法」、つまり、文法事項を含め、「日本語ですべて行う」ことです。これは、開倫塾日本語学校だけではなく、ほとんどすべての日本語学校でも同様です。

(3)開倫塾は、小学1年生から高校3年生まで、学校の授業の補習や、受験指導として英語を教えています。すべての先生が、すべての授業を「英語」で行っているわけではありません。塾生の状況、校舎の状況によって、「日本語を用いて英語の授業」を行い、「学校成績の向上」「英検合格」「第一志望校合格」を目指しての、「英語指導」に専念しています。もちろん、「英語の授業をすべて英語で行っている先生」も開倫塾にはおられます。

Q 2 : 前々号で、日本の英語教育についていくつか提案をしていましたが、もう少し、詳しくご説明ください。

A : (1)開倫塾日本語学校で学ぶ外国出身の留学生の多くは、母国の英語教育で「発音練習」を相当行ってきたためか、日本語を学ぶ際も、当たり前のように「発音練習」「暗唱」「書き取り練習」に「余念」がありません。成績のよい留学生ほど、一度学んだ日本語は、「発音練習」「暗唱」「書き取り練習」を繰り返し行っておりますので、きちんと身に着いているようです。様々な発表の機会にも、素晴らしい日本語で発表なさいます。

(2)日本の小学生、中学生、高校生、大学生、専門学校生、大学院生、社会人が、学校の英語の授業の「予習」や「復習」を行う際に、学ぶ内容の「発音練習」「暗唱」「書き取り練習」をする人は、極めて少ないようです。

(3)開倫塾で用いるテキストを学ぶ場合も同様です。せっかく、開倫塾の先生方が熱心に指導し、内容が理解できた英語も、「復習」をするときに、「発音練習」や「暗唱」、「書き取り練習」をしなければ、「身に着くこと」は極めて難しい。

(4)ですから、学校の英語の成績がよくても、英検に合格しても、受験の偏差値が高くても、難関校に合格しても、10年以上英語を学んでも、「学んだ英語を用いて、自分のことばでいえる(表現・説明できる)」ようにならないのだと考えます。

- (5)つまり、学校や開倫塾など学習塾や予備校、英会話学校などで英語の授業を受けても、学んだ英語の「発音練習」「暗唱」「書き取り練習」が不足していると、いつになっても、「英語の文章を正確に読み解くことができない」、「自分の考えを書き表すことができない」ことが多いといえます。

Q 3 : では、どうしたらよいのでしょうか。

A : (1)まず第一に、学校はもちろん、学習塾、予備校、家庭教師などで「英語を教える先生」は、原則、「直説法」、つまり、「文法事項や、語句の説明も含め、英語の授業はすべて英語で行うこと」を目指すことが大切と考えます。(栃木県足利市内の公立中学校の英語の先生のほとんどは、上智大学吉田研作先生のご指導で、直説法を導入。英語教育は、すべて英語で行っています。もちろん、小学校・中学校の ALT も、すべて英語で授業を行っています。)

(2)第二に、「一度学んだ英語の教科書・テキスト・教材」「一度解いた英語の問題(練習問題・定期試験問題・模擬試験問題・入試問題・英検問題)」「英語の参考書」は、必ず、「復習」として、スラスラよく読めるようになるまで「発音練習」、大切な文章や表現は「暗唱」、「書き取り練習」を繰り返し、「しっかり定着、自分のものとして使えるようにする」よう指導することです。

(3)第三に、英語の基本は「文法」ですから、英文法をしっかり身に着けるさせることです。学校や開倫塾のテキストに掲載されている「英文法」も、「発音練習」「暗唱」「書き取り練習」をしっかり行い、全部身に着けさせる。

○特に、高校生の英文法教科書、英作文教科書は、スミからスミまで全部「覚える」よう指導。英文法の用語(英語表現)も、意味を理解したうえで、全部覚えさせる。「英語の5文型」「文の構造」「品詞」の勉強は、極めて役に立ちます。

○先生は、「マーフィーのケンブリッジ英文法(初級編・中級編)」や「Collins COBUILD, Intermediate English Grammar & Practice」など、定評ある英文法テキストにも挑戦。

(4)第四に、「豊富なヴォキャブラリー」、そのための「ヴォキャブラリー・ビルディング」は欠かせません。学校の教科書、開倫塾など学習塾・予備校の英語のテキスト・教材、英語の定期試験・実力試験・模擬試験・英検・入試などの過去問・予想問題で、一度解いた英語の問題文・設問・選択肢・解答解説を「復習」する際に、必ず、「発音練習」「暗唱」「書き取り練習」を行う。そして、一度学んだ英語、一度解いた英語の問題、解答・解説の英語は、全部「身に着ける」「自分のものにする」よう促す。

○まじめな日本人が、10年以上英語を学んでいるにもかかわらず、英語のコミュニケーション能力が、世界でも極めて低い国として評価され続けているのは、だれが悪いのでもありません。「一度学んだ英語を復習する際に、発音練習・暗唱・書き取り練習」を「怠ったため」だと考えます。

(5)英語を学んでいて、意味のわからない語句に出会ったら、「気持ちが悪い」と考え、辞書で調べる。辞書で調べた内容は、「意味調べノート」に書き写し、その場で覚える。辞書で調べる際も、書き写す際も、ずっとその英語の語句を、「発音」し続けるよう指導。

○先生方は、「発音記号」を、計画を立て、親切・ていねいにお教えてください。音声教材の使い方も、計画を立て、親切・ていねいにお教えてください。

Q 4 : 学習塾・予備校・私立学校の幹部の先生方にお伝えしたいことは何ですか。

A : (1)英語は、語学ですから、「英文法」「豊かなヴォキャブラリー・ビルディング」は基本中の基本です。また、語学としての英語を身に着けるのに「発音練習」「暗唱」「書き取り練習」は欠かせません。

(2)日本人の英語運用能力の低さは、2100年の世界に向けてはばたかなければならない、「アルファ世代(現在10代の若者)」の、活躍を大きく妨げています。

(3)せめて、目の前にいる、学習塾・予備校・私立学校の塾生・生徒の皆さんに対してだけでも、「一度学んだ英語、一度解いた英語の問題」は、必ず「復習」。「発音練習」「暗唱」「書き取り練習」を怠りなく行い、「すべて身に着ける」よう、先生方にお伝えいただきたく、お願いいたします。

○できれば、授業の最初には、前回学習範囲の「ディクテーション(書き取り)」、授業の最後には、今回学習範囲の「発音練習」「暗唱」を、「レッスンプラン」に練りこむよう、先生方に要請いただきたくお願いいたします。

○また、もしできれば、音声学の先生をお招きし、先生方の「発音練習」を。また、「英語の歴史」の研修会を開催し、英語の言語としての特性の理解を深めていただければ幸いです。

Q 5 : 最後に一言どうぞ。

A : 僭越ではありますが、先生方がお読みになれば、必ずお役に立つと思われる本を何冊かご紹介いたします。

(1)第一冊目は、佐伯智義著「科学的な外国語学習法、日本人のための最も効率のよい学び方」講談社、1992年1月20日刊です。英語はどのような言語か、日本語との違いを踏まえたうえで、英語の学習法・教授法をご提案です。佐伯先生のお考えにご賛同の先生は、同著「英語の科学的学習法」講談社、1997年9月1日刊を是非ご一読ください。英文法指導の参考になります。同著「日本人のためのフランス語」大修館書店、1989年4月10日刊は、フランス語テキストならこうなるといふ、佐伯先生のご挑戦です。

(2)第二冊目は、渡部昇一著「講談・英語の歴史」PHP 新書、PHP 研究所2001年7月27日刊です。英語の歴史を踏まえ、英語の指導法、学習法をご提案です。「英語は文法、豊かなボキャブラリー」の重要性をご提唱です。

(3)第三冊目は、八木克正監修「Collocations Dictionary、小学館オックスフォード英語コロケーション辞典」小学館、2015年2月24日刊です。國広哲弥・堀内克明編集「プログレッシブ英語逆引き辞典(コンパクト版)」小学館、1999年7月1日刊と共に、授業中に英単語の指導をする際に、参考になると確信します。大塚高信・中島文雄監修「新英語学辞典」研究社、1982年11月刊は、英文法の指導の前に、指導項目を確認する際に、お役に立ちます。ご活用ください。

(4)第四冊目は、船橋洋一著「あえて英語公用語論」文春新書、文藝春秋、2000年8月20日

刊です。外国人比率が20%を超えたドイツでは、中堅企業の多くで、英語が第二公用語となっているようです。外国人とのコミュニケーションが求められる仕事を担当する人は、相手に日本語能力を求める前に、自身の英語力を磨き上げ、必要な時はいつでも英語で業務の遂行ができるまでにしておくことが求められます。「英語公用語」は、当然のご主張です。

(5)第五冊目は、ゲーテ著「イタリア紀行(上)」岩波文庫、岩波書店、1942年6月1日刊です。毎日数ページずつ、一語一語読んでみると、ゲーテと共に、ドイツを出発をしてイタリアを旅をしているようで、新しい発見がたくさんあり、ワクワクしてきます。素晴らしい紀行文です。

(6)第六冊目は、河野龍太郎著「日本経済の死角」ちくま新書、筑摩書房2025年2月7日刊です。同著「成長の臨界、『飽和資本主義』はどこへ向かうのか」慶應義塾大学出版会、2022年7月15日刊、同著「グローバルインフレーションの深層」慶應義塾大学出版会、2023年12月15日刊に引き続き、日本経済の課題を掘り下げて論述。この、河野氏の3冊に加え、唐鎌大輔著「強い円はどこへ行ったのか」日経プレミアシリーズ、日本経済新聞出版 2022年9月8日刊と、同著「弱い円の正体、仮面の黒字国」日経プレミアシリーズ、2024年7月8日刊の唐鎌氏の2冊と、河野龍太郎・唐鎌大輔共著「世界経済の死角」幻冬舎新書、幻冬舎2025年7月30日刊をじっくりお読みになると、世界で何が起きているかがジワジワわかってきます。トランプ大統領がなぜモンロー主義をとるのかについては、先月ご紹介した、斎藤ジン著「世界秩序が変わるとき、新自由主義からのゲームチェンジ」文春新書、文藝春秋 2024年12月20日刊が参考になります。是非、ご一読ください。

(7)第七冊目は、ユーラシア・グループ「2026年世界10大リスク」2026年1月6日HPで発表。ベネズエラ侵攻直前までの、世界の10大リスクを、HPで公表。参考になります。

(8)第八冊目は、横山禎徳著「戦略、組織、そしてシステム」東洋経済新報社、2025年12月6日刊、横山氏の遺著です。同著「組織、『組織という有機体』のデザイン、28のボキャブラリー」ダイヤモンド社、2020年3月18日刊を深化させた、組織論の名著です。「戦略は自分の強さに立脚することが基本」と喝破。大いに勇気づけられました。組織の在り方、活用の仕方にご関心ある先生には、特におすすめです。

(9)第九冊目は、毛受敏浩著「移民1000万人時代、2040年の日本の姿」朝日新書、朝日新聞出版、2026年1月13日刊です。15年後、日本は、10人に1人が外国人の時代が到来。移民なしでは成り立たない時代に入ります。それまでにどうすればよいか。移民政策の第一人者、毛受先生の最新作を是非ご一読ください。

(10)十冊目は、クリントンロシター著「立憲独裁、現代民主主義諸国における危機政府」未知谷、2006年10月17日刊です。ドイツ、フランス、イギリス、アメリカにおける立憲独裁の歴史を分析した名著。今こそ、もう一度読み直すべき時期と考えます。ヤン・ヴェルナー・ミュラー著「試される民主主義、20世紀ヨーロッパの政治思想(上・下)」岩波書店、2019年7月26日刊と共に、是非ご一読ください。

○現代は、自由主義の危機であるとともに、民主主義の危機の真ただ中だからです。